



KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

Co-funded by the
Erasmus+ Programme
of the European Union



**産業研究所講演会
(IIR Seminer)**

ハンガリー現代史とヒトの移動

Modern Hungarian history and the 1956 migration crisis

**荻野 晃氏
(長崎県立大学国際社会学部教授)
Akira Ogino
Professor, Faculty of Global and Media Studies,
University of Nagasaki**

**2017年4月15日(土)15:10~17:30
関西学院大学大学図書館ホール
Date & Time 15 April 2017 (Sat), 15:10 – 17:30
Venue Kwansei Gakuin University Library Hall**

**関西学院大学産業研究所
Institute for Industrial Research (IIR), Kwansei Gakuin University**

【産業研究所講演会】

ハンガリー現代史とヒトの移動

○市川 それでは、「産業研究所講演会 ハンガリー現代史とヒトの移動」を始めさせていただきますと思います。私は本日司会を担当いたします産業研究所の市川と申します。どうぞよろしく申し上げます。

本日は、長崎県立大学から荻野晃先生に来ていただきました。多くの学生の皆様がいらっしゃいますので、少し学生向きにお話をいたしますが、ハンガリーと言うと皆さん、そんなにドイツやフランスほど有名じゃないというイメージをお持ちかもしれませんが、ハンガリーは今日、ある意味世界の縮図になっています。

例えば2年前から起こった難民危機のとき、オルバーン政権が難民の通過を許さないということで壁をつくと発言したわけです。それはトランプのメキシコ国境に壁をつくるという発想に非常に近いわけです。

それからオルバーン政権は非常に強力的に、今日、中央銀行や、メディアを握っています。ある意味ナショナリスト、ポピュリストの支配する今日の状況、世界各地の状況に極めて似ているわけです。

さらに申し上げますと、つい最近、皆さんニュースで知ったかもしれませんが、オルバーン政権が中央大学、Central European University を潰そうということを言い出しました。学問の世界にまで手をつっこんでいる。そういった動きがあるわけです。

そういった世界のポピュリズム、ナショナリズムの動きの最先鋒がハンガリーであります。荻野先生は実は本学の卒業でいらっしゃいまして、学生の皆さんにとっては大先輩に当たります。本日ハンガリーの歴史と、現在の政治の第一人者をお呼びできたことを非常に誇りに思っております。

本日は1時間程度、荻野先生に御講演いただいた後、皆さんからの質疑応答を受け付けまして、1回休憩を入れます。その後、インテンシブに深い内容で質疑応答に参加されたい方は残っていただいて、質疑応答を続けていただければと考えております。それでは長くなりました。荻野先生、どうぞ御講演よろしく願いいたします。

○荻野 皆さん、こんにちは。御紹介にあずかりました長崎県立大学の荻野と申します。

私は、1990年に法学部政治学科を卒業して、その後同じく法学研究科の大学院に進み

まして、いつまで学生だったのかはいまだによく覚えてないような状態ですが、ちょうど12年前に現在の長崎の勤務先に着任しました。

関学には来るのが1年半ぶりぐらいで、久しぶりです。こういう形でお招きいただけるのは非常に光栄で、本当に感謝しています。

「ハンガリー現代史とヒトの移動」で、1956年、1989年、2015年と3つの西暦の年代をサブタイトルで並べています。昨年、いろんなどころで3つの西暦の年についてしゃべる機会がありました。まず1956年が、2016年はハンガリー事件から60周年のアニバーサリーの年で、東京でシンポジウムがありまして、そこで56年のことについて話しました。

1989年も、昨年秋にまた別の学会で少し体制転換とかいわれる、いわゆる社会主義から共産主義の体制が崩壊して民主化のプロセスが始まった。この1989年には、いろいろな人の移動が出てきました。

2015年、先ほども市川先生から出ました難民問題。これについて勤務先の、ちょうど1年ほど前、公開講座で何かしゃべれと言うので、たまたま難民の問題が出てきたときだったので、話しました。そこで、今回はこの3つをつなげて話をしてみようかと思いました。

まず、ハンガリーという国がどこかということです。ヨーロッパ大陸の真ん中あたりに位置して、内陸で海のない国。現在の領土はこういう形で、ウクライナとルーマニア、セルビア、クロアチア、スロベニア、オーストリア、スロバキアといった国々と国境を接しています。

少し現代史の流れの話をします。700年にわたってヨーロッパに君臨してきたハプスブルグという王家の領土であったオーストリア・ハンガリー帝国が、ちょうど今から100年ほど前、第一次世界大戦の末期に崩壊しました。総力戦と言われる戦争に耐えられなくなって、多民族国家が瓦解してしまった。王朝が倒れた。そこから国民国家としてのハンガリーがスタートする。

そこにおいて、トリアノンという条約が第一次大戦の講和条約ですが、今囲っている太い線が今の国境。現在のハンガリー、点線の部分をずっと見てください。これが建国以来、1100年余り前、建国したときの歴史的といいますか、初代国王の王冠の領土といわれるものが、この点線の部分。このほとんどを第一次世界大戦の講和条約では、トリアノン条約で失ってしまった。

約3分の2の歴史的領土を失って、周りの国々にハンガリー系の人たちが取り残されるディアスポラみたいな状況が生まれてくる。このことが100年余りのハンガリーの歴史にとって非常に重要な意味を持ってくるんです。

失った領土を取り戻そうとして、やがてハンガリーがナチスドイツに接近していく。しかし一時的に領土を、こういう形でナチスにくっついていって、調子のいいときには斜線で引っ張っている部分を取り返したりもしたのですが、やがてドイツとともに敗戦国になります。

間もなくソ連が影響力を行使する形で、社会主義とか共産主義と呼ばれる体制が1940年代の末に成立する。しかし、この社会主義体制に対する不満は間もなく出てくる。これが最初の1956年のハンガリー事件と呼ばれる事件です。

いわゆるソ連の独裁者であったスターリン後押しで、後ろ盾をもって政権を掌握した小スターリンとかいわれていたような人たち、あるいはスターリン主義者たちに対する反感が募っていく中で、スターリンが死んだ後、後を継いだフルシチョフという指導者がスターリンに対する、生前のいろんな過ちを暴露したスターリン批判が1956年にありまして、その影響が間もなくハンガリーで出てきます。

最初に出てきたのはポーランドですけど、さらにハンガリーの場合は武装蜂起みたいな形でソ連との戦闘状態に入っていました。ここから先のことは今からいろいろ話をするので、一旦ここで次へ行きます。

まずハンガリー事件の背景、いわゆる戦後ヨーロッパが東西に分断される、いわゆる鉄のカーテンという言葉で説明されます。

ちょうど冷戦期のヨーロッパの地図で、ドイツが東西に分断されて、赤で塗られた部分がいわゆる東西対立の東側に当たる地域。このあたりの国境線を、かつて冷戦時代は鉄のカーテンというヨーロッパを分断した状態であったわけです。

フルシチョフのスターリン批判の影響が東ヨーロッパに及んでくる。その最も重要であったのがハンガリー事件です。やがてソ連軍が出動して、いろんなところで戦闘が始まります。そういう中で戦闘を避けるようにして、ハンガリーの人たちが難民となってオーストリアに、当時まだ国境が開いていたので、逃げていく人が出てき始めます。

さらに10月23日に始まった事件、蜂起がやがて11月4日に、本格的にソ連軍が出動して、いよいよ蜂起を鎮圧する、武力で抑えつけるといったようになりますが、そのと

きに大量の難民が発生します。大体全人口の2%弱ぐらいの人たちがオーストリアとの国境を越えて逃げていった。

多くの人たちはアメリカや西ヨーロッパとかそういうところに、やがて難民という形で受け入れられていくわけですが、一部の人たちを何とか帰らせようとして、当時のカウダルという指導者の政権は、3月末までに戻ってきたら逃げたことに対して罪には問わないとか恩赦という形でいろいろ呼びかけて、一部帰ってきた人もいますが、多くの人たちは逃げたままであります。

オーストリア国境を越えて逃げていった人がこれ以上出ないようにということで、1957年の1月中旬ぐらいに、より厳しい国境管理へと転換していく。それでもまだ何とか国境を越えて逃げようという人たちはいました。

最終的に5月27日に、1957年の高圧電流による鉄条網でオーストリアとの間の国境を封鎖する、閉鎖することになりました。これ以降、逃げていく人は格段に少なくなりましたが、大体1月中旬から5月末まで4カ月ぐらいの間に4,457人がオーストリアの国境を越えて逃げていったとされています。

こういう写真を幾つか紹介してみますと、ちょうどオーストリアとハンガリーの間、この場所を特定はできませんが、水路か何か川になっているところをゴムボートみたいなもので何とか脱出しようと、逃げていこうとしている人。

あるいは、こういう形で、当時、もう11月だったので寒い、コートを着ながら、もう着のみ着のままのような形で逃げていく。あるいはオーストリアで何とか逃げてきた人たちに対しての食糧支援なんかもしている。

これはスイスへ向かう列車、中立国であるスイスも結構ハンガリー人の難民を当時受け入れていた。あるいは、これからどこかオーストリア経由で第三国へ行こうとしている。しかし、この足を失った人だけはオーストリアにとどまる。手を振りながら電車が発車するのを見送っているような写真もあります。

こういう形で1956年から1957年にかけて、ハンガリー事件のあおりで人口の約2%弱に上る20万近いハンガリー人が難民として国外へ出国していくことになったことが、まず初めに冷戦期にありました。

その後、ハンガリーでは1960年代に入ってくると、柔軟な国内政変に転換して、1960年代の後半には経済改革をやりながら、東ヨーロッパの中では統制の緩い、比較的オープンな国になっていくわけです。

やがて、1980年代の後半に、また新たな動きが出てきます。1980年代の後半、東側陣営、いわゆるソ連や東ヨーロッパ諸国では、1980年代の初頭に東西対立が激しくなってきた、ソ連では軍拡とかいろいろなものを進めていったんですが、経済的に非常に不況に追い込まれていく。ハンガリーも同様にだんだんと経済の調子が80年代になって悪くなってきた。

そういう中で、1985年にソ連にゴルバチョフという人物が最高指導者、ソ連の共産党書記長に就任します。彼がいろいろとペレストロイカと呼ばれる、再建という意味ですが、社会主義体制を何とか再生させよう、もう一度生まれ変わらせようといういろいろ改革をしていく。あるいは、その改革を進めていくためには軍備とかを縮小するとか、あるいは西側からもいろいろな形で支援を得ていくためには、アメリカやヨーロッパ諸国との関係を改善していこう、新思考外交という動きがソ連で出てきます。

この影響が東ヨーロッパにも間もなく及んでまいりました。ハンガリーとかあるいはもう1つポーランドではゴルバチョフの改革の動きを比較的好意的に受けとめて、それに続こう、一緒に歩調を合わせて改革をしていこうということが1989年になってくるとそうやってきます。

ハンガリーでも1988年に、これまで1956年以来ずっとトップに君臨してきたカーラルという指導者が退陣をして、人事やなんかが刷新されて、民主化という動きが1年ほどの間に加速していくんです。しかし、ペレストロイカとか新思考外交に背を向けていくような国、反発するような国がもちろんありました。その代表的なのがルーマニアと東ドイツ。こういった国々では国内政治がむしろ改革を拒否して、硬直化していく中で人々の不満が強まっていく。

ルーマニアでは1980年代の後半になってくると、経済的な行き詰まりからチャウシェスクという最高指導者が、農村を改造して近代化を無理やり進めようとしたり、農村でこれまで近代化がおくれているけれども、民俗学とかそういう世界では貴重な文化遺産が残っている、そういう村々を破壊していこうとする。そうすると農民たち、特にハンガリーとの国境に近いハンガリー系の人たちがたくさんいるような村を重点的に破壊していく。

そうになってくると、いられなくなって、住むところを追われてハンガリーへ国境を越えて行く。難民がハンガリーに1980年代の後半に流入してくる。ルーマニアとハンガリーの関係はその影響もあって非常に険悪化することになります。

特に1988年ごろになってくると、もう総領事館をお互いに閉鎖するような事態になったり。写真を紹介しますと、機動隊みたいな人たちがずっと列をなしている。この市電が走っています。この向こうが何かと言ったら、ハンガリーの首都ブダペストにあるルーマニア大使館の建物を警備している。何でしているかと言ったら、難民や何かと同じハンガリー人の同胞たちが追われて、逃げてきている。かわいそうな人たちを見て、多くのハンガリー人たちがルーマニアはけしからんということで、大使館の前で抗議行動をした。特に4,000人規模とか言われるんですけど、1988年6月27日、ルーマニア大使館の前で抗議行動が起こります。

さらに同じ日、英雄広場という歴史上の人物の銅像を飾っている、円柱のこういうモニュメントがあるんですが、この広場にみんな集まって夜、ろうそくか何かをつけながら、ルーマニアのやっていることに対して抗議行動をした。きょうブダペストで、この英雄広場で多分、デモや何か集会をやっているはず。7時間の時差ありますから、午後から夕方になったらここに集まって、オルバーンに対するいろんな抗議行動をきょうもやるらしいです。

6月27日の大規模な抗議行動の後、ルーマニアにあるハンガリーの総領事館を、一方的に総領事館の人間を全て48時間以内に出していけ、追放ということをしてルーマニアが踏み切る。同じ社会主義陣営の、一応ワルシャワ条約機構という同じ同盟ブロックの中にも関わらず、総領事館を閉鎖する異例の事態を迎えることになります。

やがて、ルーマニアから入ってくる難民の問題で、ゴルバチョフに幾ら言っても2国間で話し合ってくれしか、何も助けてくれない、支援してくれない。そういう中でハンガリーは、結局難民の問題を国際社会の支援を得て何とかしていこう、そのために難民の地位に関する条約という1951年にできた国際条約に、ハンガリーも初めて東側の国で加盟することになりました。

このことが違う局面に入っていくのですが、1987年にハンガリーでは国外に旅行する自由を保障する。つまりパスポートを申請すればみんな取って、金さえあれば好きなところへ旅行に行っていくことになりました。そうなってくると、先ほど1956年の後、難民が出ていった後、鉄条網で封鎖していた、その国境の鉄条網自体が意味をなさなくなってきました。人権侵害とか、かつての国際体制のシンボルであった、そういう鉄条網を撤去しようと、1989年5月にハンガリーは決定します。

それが別に歓迎はしないけれども、とめもしないという形で容認していく。そうする

と何が起こるかと言ったら、東ドイツはハンガリーやポーランドと違って、ゴルバチョフの改革ペレストロイカに対して歩調を合わせない。隣の家が壁を塗りかえたからといって、我が家も何で塗りかえないといけないのかと、そういう発言まで指導者たちがするようになった。

そういった中で、東ドイツの人たちはこんな国にいても未来はない、西ドイツへ逃げたいと思っていた。そうするところにオーストリアとハンガリーの国境が、言ったら封鎖されていた国境が反故になりました。

東ドイツの人たちはチェコスロバキアを経由してハンガリーに入ってくれば、この国境があいたわけですから、オーストリア経由で亡命、移住ができるかもしれないという形で、1989年の夏に大量に東ドイツの人たちがハンガリーに入国してくる。東ドイツの当局も警戒はしていたけれども、何か有効な手を打つ前に夏期休暇や何かを口実にしてハンガリーに入ってきた。

ハンガリーは1960年代以降、東西ドイツで離散した家族とか友人たちが、実はバラトン湖というリゾート地があるんですけど、そこに来てなかなか会えない人たちが何年かに1回ぐらいここで、離散した家族や友人たちが会うことができていたんですが、それがハンガリーにたくさん入ってきて、逃げようと試みます。

やがて東ドイツは、自分たちの国民をさっさと返せ、そんな非合法に居座ろうとしているやつを許していいのかと、いろいろ圧力をかけてきます。やがてハンガリーは当時ネーメトという首相とホルンという外相は西ドイツと話をつけて、国内にいる人たちをオーストリア経由で出すから受け入れてほしい、支援してくれと。

西ドイツもぜひそうしてくれ、全面的に支援するという形で、同盟国の東ドイツを見限るような形でハンガリーは国境を開きます。これが鉄条網を兵士たちが切断している、撤去する作業。これが当時のホルンという外相、これオーストリアの外相の当時モックという人だと思んですけど、これは儀式みたいにはさみで鉄条網切るようなことをやったり。

さらに1989年の夏に、ハプスブルグ家の、かつての王家の末裔に当たる人を担ぐという人が、ヨーロッパピクニックを企画して、東ドイツの人たちをオーストリア国境から出すようなイベントや何かをやって、ハンガリー側もそれを見て見ぬふりをしていたという形です。

やがてハンガリーが国境を開くことによって、最終的にはベルリンの壁の崩壊は東ド

イツの人たちがどんどん逃げていく、それを取り締まろうとしたときに初めて東ドイツ国内で反体制デモが起きて、ホーネッカーという指導者の体制があっけなく崩壊します。

その1カ月もたたないうちに、ベルリンの壁自体も崩壊する、いわゆる人の移動を遮断していた壁がこういう形で崩れる。ハンガリーの動きがベルリンの壁の崩壊、いずれそうになっていたにしても、やっぱり何か月も早く崩壊させる要因にはハンガリーのオーストリア国境の解放は寄与したと考えられますが、こういう形でベルリンの壁の崩壊にやがてつながっていく。

このときハンガリーは歴史的に冷戦終結に重要な役目を果たしたと言えます。そこからまた四半世紀余り、体制転換と呼ばれる民主化の動きがあつてから、ハンガリーでは1999年に北大西洋条約機構NATOに安全保障が、アメリカや西ヨーロッパの入っているNATOに加盟する。

あるいは2004年には、ヨーロッパ連合EUにも加盟することになりました。こういう形で時間はかかりましたが、次第にヨーロッパ統合とかそういう動きの中にハンガリーや周りの国々も、東ヨーロッパの国々も入っていくわけです。

しかし、その後、民主化とかヨーロッパ統合は順調に進んでいったのかと言うと、必ずしもそうではない。むしろ21世紀に入ってから次第に経済の調子悪くなったり、いろんなことはあるんですけど、やがて非常にナショナリスティックな、最近ではポピュリズムという言葉で言われることも多いような、非民主的な側面の強い方向に政治が向いていくことになります。

2010年にオルバーンという指導者が総選挙で大勝して、政権につきます。実はこの人、1998年から2002年まで4年間首相をしたことがあるんですが、そのときは次の選挙に負けて、8年ぶりに復活して、また首相に返り咲くんです。このとき絶対的な多数を議会で得ることになった。ハンガリーの場合、政治が、日本の衆議院に当たるものしか、参議院に当たるものがないので、一院制なので、そこで3分の2を優に超える議席を確保してしまうと、何でもやりたい放題できる。

憲法を改正するとか言っても日本よりはるかに緩い、ハードルは低いわけですから、憲法自体を、1989年に制定された憲法そのものを否定して、新たなものに、自分たちに都合のいいような憲法を作ったり、いろんなことをやっていくわけです。例えば、その前の政権がつけた地方銀行の総裁が気に入らないと言ったら、副総裁のポストを

いっぱいつくって総裁の権限を弱めたり、あるいは裁判所とか司法の場にもいろんな形で介入していったり、あるいは新聞とかメディアが都合の悪いことを書いたりしたら、いろんな形で圧力がかかるような法律を制定したり、やりたい放題やって、そのたびにEUとかいろんなところから批判されるんです。

しかし、これは自分たちの国の主権がEUよりも勝っているとかなんかことを言っ
て、2012年やったか、ブリュッセルは昔のクレムリンとって、いわゆるソ連共産党本部のあるところ。オルバーンが革命記念日、3月15日の祝日のセレモニーで演説して、EUが非常に怒ったり。特に、統一したドイツとは2010年に第2期オルバーン政権ができるまでは非常に良好な関係が続いていたんですが、東ドイツの人たちをオーストリア経由で逃がす、そういう決定をしてくれたのを非常にドイツ側も評価したりして良好な関係だったんですけど、今はドイツとの関係も非常に険悪な状態です。

9月に選挙がドイツでありますけど、連立与党の社会民主党の首相候補になるシュルツという人とオルバーンは、ここ数年宿敵みたいな間柄になっているんです。そういったオルバーンが無茶苦茶をやり始めたときに、ちょうど中東で起こった紛争、シリア、イラク、あるいはリビアとか、ちょっと離れていますけどアフガニスタンとかの紛争。こういった紛争が長期化する中で、住むところを追われた人たちが国外に脱出していく。その中には、ヨーロッパを目指す人たちが後を絶たなくなってきた。

当初、地中海を渡って、イタリア半島に上陸するというルートが主だったんですけど、ちょうど2015年あたりから、バルカンルートと呼ばれるようなトルコ、ギリシャを経由して、このあたりの海を渡って、ギリシャからずっと北上していく、こういうルートが2015年あたりから難民が大量にギリシャ経由で北上する。そのときのEUの玄関口に当たる。ギリシャの場合もEUの中に入っていますけど、ちょっと飛び地みたいな感じで地理的に離れている。実質的にドイツやオーストリアといった西ヨーロッパの国々の玄関口に当たるのがちょうどハンガリーであった。

特にシェンゲン協定という緑で囲まれた色の国々が加盟している、イギリスは入っていないです。後からまた説明しますが、この域内は、どこかの国々に入国をすれば人の自由な行き来ができる。どこかの国で入国審査を受けてパスして入れば、そこから先は自由に行き来ができるオープンな国境をつくらう、ヨーロッパの原野を体現しているシェンゲンエリアの玄関口に当たるのがハンガリーでありました。

そこで、ハンガリーに大量の難民が2015年の夏以降入ってきました。当初、ドイツの

女性の首相メルケルさんはどうしたか、戦後西ドイツ時代から通して言えるのは、そういうナチスのときにいろんな人たちを虐殺したり、追放したり、逃げていった人たちが後を絶たなかった。そういう反省に立って、できるだけそういう困った人たちを受け入れてあげようと西ドイツはしていました。

特にいろんな形で第二次世界大戦で失った領土とか、そういうところから命からがら西ドイツへ逃げてきた現代のポーランドであるとか、チェコスロバキアあるいはルーマニアとかにもドイツ系の人たちがたくさんいたのですが、そういう人たちが共産主義の体制でいられなくなったりして、逃げてきた人たちを受け入れたたりもしていた。ほかにも紛争地域から逃れて来た人たちを難民として受け入れたたり、そういうことをしていました。

メルケル政権は2015年9月に難民の受け入れを表明することになります。本来だったら入って来れないような人たちを、こういう大量に出てきて、もうどうしようもないからドイツは受け入れると表明します。難民にとってみたらメルケルは非常にいい人だとなりますが、しかしバルカンルートで北上してきた人たちがどうしても通らないとならない、越えないといけないのがこのハンガリーであった。ハンガリーに大量の難民が入ってきます。

そこでどう対応したのか。南部の国境、いわゆるセルビア、クロアチアといった国々、セルビアがEUにまだ未加盟、クロアチアは最近EUに入りましたが、まだシェンゲン協定の加盟国にはなっていません。非シェンゲンエリアの国境をフェンスとか鉄条網を設置して、セルビアで175キロぐらい国境線があります。そこを4メートルぐらいのフェンスをつくって難民が入ってこられないようにする。これからトランプがやろうとしているようなことを、先駆けてオルバーンがやったと言えるのです。10月に入ってくると、セルビアがだめならクロアチアから来るので、クロアチアにもフェンスをつくることになります。

そうすると、西ヨーロッパ諸国は何てひどいことをするんだ、こんな人道に反するようなことをしていいのかみたいなことを、ハンガリーでは非常に国際的に非難を浴びることになります。

これについて、最近僕の友人である、経済分野でハンガリーのことをやっている友人が、今ブダペストで在外研究している人がいます、松山大学の先生です。彼はいろいろ難民のことが出てきて以来話しているのは、やっていることは法に違反してはいな

いが、余りにもオルバーンが2010年以来、手荒なことをしているから、そのたびに西ヨーロッパのメディアがオルバーンを批判する。そういう中でやっぱりオルバーンはひどいやつだという報道がどうしてもされてしまう。

特にユーチューブで見た方もおられるかと思いますが、セルビア国境のレスケという村で難民が何とかハンガリーに入ろうとしていて、それを押しとどめようとする警官とか兵士とかともみ合いになったり、いろんなことがありました。そのときに子供を抱えている親の足をかけて、こけさせて、子供が転んで血を出したりしてる動画も当時流れたりして、ああいうのを見たら、ハンガリーはひどいことをするんだね、みたいに言われているのですが。

ただし、シェンゲン協定のエリア内では人の移動が自由というかわりに、例えば僕がハンガリーに行くときは、羽田からフランクフルトかミュンヘンに入っています。ここで非常に最近、結構昔より厳格なパスポートコントロールとか荷物のチェックがあって、そこでブダペスト行きに乗りかえていたのですが、ここではハンガリーに入ってくると入国審査とかはなし。

帰るときは、ブダペストでは日本で国内線に乗るみたいに、荷物チェックはあるけれども、とにかくミュンヘンかフランクフルトまで行って、そこで出国の審査をして、帰るときはそんなに、出ていくんだからあんまり何も言われません。そういう形で昔だったら、行くたび経由するところでも、それからハンガリー入るときも、出ていくときとか出入国の検査がありましたけど、今はハンガリーではそういうものはなくなっています。

最初に非シェンゲン国から入ってくるときに厳格な出入国審査をする、その前提に立って、一度入ってくれば人の移動が自由になるという形ですが、これがシェンゲンの。これがセルビアやクロアチアから入ってくる場合には、当然出入国審査は厳しくしないとイケないのは確かです。

同時にEUの間ではダブリン規則があります。最初にEUの中で入国した国で難民申請をしるというものです。つまり難民にとっては、本当はギリシャでしないといけなけれど、ギリシャは手に負えないし、財政危機とかでそれどころではないから、マケドニアとかそういうところにすぐ難民を出してしまう。そうすると、セルビアやクロアチアまで北上してきたらハンガリーを通ろうとする。このときハンガリー、本来だったら難民の人たちは、ハンガリーで難民申請をしないといけないです。これがダブ

リン規則と言われるものです。

なぜそんなことをするのかと言うと、ある国で難民申請しているのだけれども、余り気に入らないから隣の国へ行ってみたい、例えばイタリアで難民申請をしながら、ついでだからフランスまで行って、また難民申請をフランスでもするような、そういうことをさせない、二重申請を防止するためです。まず、最初に入ってきた国で申請をしろということなんです。

難民にしてみたらハンガリーにはとどまりたくない。ドイツやスウェーデンに行きたい、生活水準のもっと高いところで受け入れてほしい。我々はこんなところにいたくない。それを難民が言うと、ハンガリー人にとっては、何だこいつらみたいな反感を持ったりすることにつながっていったわけなのです。

ハンガリーの措置としては、シェンゲンとかダブリンを厳格に適用すれば、こういう形で難民をシャットアウトせざるを得なかった。それほど法的に違反したことをハンガリーはしてない。手荒なことをかなりしたことは事実ですが、しかし、その後、同じようなことはほかのルーマニアやブルガリアも多かれ少なかれ、ハンガリーの国境が閉じられてもやっているし、あるいはハンガリーにしても、2015年に関して、10万人当たりの人口比で、一番たくさん難民を受け入れているドイツやスウェーデンに次いでぐらい2015年には難民の受け入れを実際に行っているわけですから、何で自分たちばかりが悪く言われたいといけないのだと、彼らにしてみたら非常におもしろくなかったのは確かであります。

特にハンガリーでいうと、冒頭で言ったトリアノン条約とかそういう条約で領土をいっぱい奪われて、多くの国境外、周りの国々に同胞が取り残されるような事態になった。自分たちは不当に国際社会では扱われているとか、被害者意識みたいものが強いから、また難民の問題でも自分たちは悪者にされたと、彼らはどうしても思ってしまうがちなのです。

EUのルールに基づいて自分たちはやったのに、こんなに非難されるのは、と彼らは思っている。オルバーンのやり方に対して国内でも反発はもちろんありますけれど、ただし難民の問題を通して、オルバーンの政権に対する支持率が格段に下がったかと言うとそうではほとんどありません。ほとんど与野党の支持率とかには変化がなかったわけです。

写真でちょっと紹介してみますと、2015年9月に冷戦終結期の問題について、いろいろ

ろ外交文書とかいろんなものを調べに行ったとき、ブダペストの東駅が、オーストリアやドイツに向かう国際列車が出る駅ですが、東駅の周りが難民キャンプみたいに、こういうテントや何かを張った人たちが生活している。たまたま偶然そのときと重なったので、日曜日、資料館が閉まっている日にスマートフォンで写真を撮ってきたものです。映りがよくないです。こういう駅の前の広場、ちょっと地下みたいになっている。地下鉄の駅とつながってるのですが、そこにいっぱい難民が生活して、現地の人服とか靴とか要らないものを、あげるからどうぞみたいに置いている。

テント張って恐らく、順番が来て、オーストリア方面に向かう列車に乗って出ていったら、また別の人がこのテントに入って、寝泊まりしたりということだと思のです。

地下のコンコースみたいになっているところから、階段で上がっていったらホームにつながっているんですが、このメガホンを持っている人がアラビア語かなんかしゃべれる人みたいで、通訳みたいなものをして、場内整備をしている。

これテープ張って、難民がここにいろという、警官や何かこんなところでこういうふうにやっている。

先ほどの地下から階段で上がってくる。ちょうど列車がいるところに今度は乗り込むところ。列車のこのあたりも、普通だったら改札みたいなものがない、そのままホームに入っていけるのですが、このあたりちょっと警察がいていろいろと人の出入りをチェックしている。

そのときホームに張ってあったのですが、ブダペストとGyorという町があります。ここを通過してオーストリア、ウィーンに行く列車はHegyeshalomという小さな村みたいなところを国境駅にして向かいますが、どうもここまでしか列車が行かなくなりました。当時、難民がいっぱいいるときも国際列車を一旦運休することになりました。HegyeshalomかあるいはSopronという西に突き出た町があるので、そこかどっちかへ行ったらいいよ、Hegyeshalomから国境まで5キロメートル歩いて行ってください、Hegyeshalom、Sopron、どちらかへ行って、そこから国境を越えてオーストリアに入国しなさいということで、こういう張り紙「change the train here」があります。

とにかくローカル列車に乗って終点まで行って、そこから歩いてオーストリアに行きなさいよというメッセージの紙が出ていたり、封鎖された南部国境でこのような鉄条網をしたり、あるいはフェンスの下に鉄条網などがあつたりしています。

これ実はネープサワッチャウというハンガリーの全国紙がかつて、旧共産党の機関紙

だったのですが、実は新聞も昨年10月の頭にオルバーンの圧力で廃刊に追い込まれてしまった。そのまだありし日のネープサワッチャウという新聞がギャラリーとかいって難民の写真を特集していた。そこからちょっと拝借してきたのですが、こういう鉄条網を張って、それでもそれをかいくぐって入ってこようとする。

あるいは警官と難民がもみ合いになっている。難民たちはこのようにしながら歩いて、とにかく西ルートを目指していく。当時はこういうテントや何かはNGOや何かを用意したテントで寝られるときは寝る。すし詰め列車にとにかく乗り込もうとしている。

最後のスライド、ハンガリーでは昨年10月、国民投票が行われました。いわゆる法的拘束力を持ったレファレンダムという何かの争点で、政府なり、あるいは政党なりが一定の署名とかを集めたりしたら、国民投票に訴えることがハンガリーではできます。

日本でもいつだったか、10年ぐらい前、第一次の安倍内閣のときでしたでしょうか、国民投票に関する法律が制定されて、憲法を本当に改正するときは最後に国民投票にかけることになりました。

ああいう国民投票が、実はハンガリーでは1989年以来たびたび行われてきました。最近だと昨年10月2日に行われた国民投票があります。何を争点にしたか、2015年にEUでは大量に入ってくる難民を、加盟国で経済的規模とか、あるいは人口比とかいろんなもので割り当てをして、受け入れの分担をしようということになりました。

ハンガリーではちなみに1,294人、16万人のうちハンガリーは分担しろということになりました。ちなみに大体990万、1,000万弱の人口の国、日本も10分の1弱ぐらいだとすると、ハンガリー比較で、日本がそのハンガリーの割り当てられた難民に当たるのが大体1万4,000人ぐらいでしょうか。受け入れるのは。

日本はほとんど難民は、2桁ぐらいしか年間定住者として受け入れていないです。1,300人ほどの数であったとしても、それなりに大きな負担、彼らにとっては負担であった。

ハンガリーだけじゃなくて、ポーランド、チェコスロバキアといった国々も嫌だと反発します。特にスロバキアはEUが割り当てた難民の受け入れ分担、これが不当だと、欧州の司法裁判所に提訴すると、ハンガリーもそれを支持すると言っていました。

ハンガリーの場合はEUが指定した受け入れ分担を、国民投票で拒否しようとするオルバーンは思いつきます。彼がレファレンダムを思い立った背景には、昨年6月のブレグ

ジットといわれるイギリスのEUからの離脱を問う国民投票が、離脱が多数を占めた。これによっていずれ近い将来、イギリスはEUから離脱することになった。EUはそれと同時に非常に動揺した状態になります。

2010年以降EUはギリシャの財政危機とか、ユーロ危機とか、難民、イギリスが離脱する、あるいは極右とかポピュリズムの台頭とかいろんな形でEUが今動揺している。そういうときにオルバーンは国民投票を考えつきました。

オルバーンの場合にはイギリスと違って、EUから、不満があったって出たくはない。イギリスのEU離脱がというとき、彼も離脱反対を、とどまる方を支持していたのですが、オルバーンの場合にはEU懐疑派とかいろんな言い方をよくしますけれども、どっちかと言うと出たいんじゃないで、とどまっていろいろごねたりいろんなことをして、EUから譲歩を引き出そうという、非常にやり方として嫌なタイプです。争点として、国民投票に望みますと、受け入れ分担するようなEUの政策の是非を問う。オルバーンとしてはそれを拒否しようと、分担に反対しようと呼びかけます。

この結果を先に言いますと、投票率が43.9%、これ当初の報道をしているのですが、最終的には43もなかったと言われていています。いずれにせよ2012年にオルバーンたちが、ヒュレスという政党を中心にした政権がつくった憲法のもとでは、投票率が50%過半数ないと投票、レファレンダムそのものが成立しないことになりました。

しかし、一方で有効票の98%が分担に反対であった。これをもって、オルバーンたちは一方的に勝利だと言っておりました。EUは、これで少しはオルバーンの影響力が陰りが見えてきたかと期待しているんですけど、残念ながらそうはなってはいません。

例えば、1989年にできた体制転換のときの憲法下では、43.9%、40%以上投票率があつたら国民投票は成立していました。EUに加盟するときも大体8割ぐらいが賛成。1997年にNATO加盟のときも、投票率はこれとほとんど変わらないぐらいだった。オルバーンたちにとっては、決して自分たちが投票が成立しないからといって負けたわけじゃないんだ、十分勝ったんだと勝利宣言みたいなことをして、その後はいろいろと憲法を改正するとか、EU以外の国から移住する場合には政府の許可を厳格にするとか、いろんなことを憲法に定めようとしたり、これもうまくいかなかったり、あるいはことしになって難民申請をしている人たちを、1カ月ほど前、収容所に拘束することを法的に可能にするとか、いろんなことをまだやっています。難民の問題については今のところ、ちょうど国民投票までが1つの区切りかなと思って、ここまでお

話をしてまいりました。

1956年、1989年、それから一昨年来の難民危機と、3つ違う時代のことを人の移動という側面からハンガリーの現代史を捉えてみました。一旦時間が参りましたので、終わりにしたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

○市川 荻野先生どうもありがとうございました。ちょうど1時間でお話をしてくださいましたので、25分ほど質疑応答ができます。

休憩時間の後の質疑応答はよりプロフェッショナルな質疑応答にしたいと思っていますので、まずオーディエンスの学生の皆さん、それから本学の教員ではない本日来ていただいた外部の皆さんの中から、非常に基本的な内容でもお答えいただければと思いますので、何か質問もしくはコメントがあれば挙手していただければと思うんですがどなたかいらっしゃいませんか。

特に学生諸君にとって、最近、私は非常にショックを受けたのですが、学生諸君は冷戦時代という時代に生を受けていないのです。ですから、いろんな意味でわからないところとか、アンクリアな部分があったら、確認でも結構ですので質問をしてください。

○質問者 荻野先生、どうもありがとうございました。

ハンガリーのことについて余り我々知らないところがあったので、興味深く聞かせていただいたのですが、基本的なハンガリーの状況を教えていただきたいです。

きょうのお話は人の移動にポイントを絞って、違う3つの時代でお話をいただきました。最後の2015年あたりではハンガリーが難民の人を受け入れる側の立場で、来た人が、さらに難民の人たちがさらにハンガリーを越えて、ドイツとか西側に移動しようという、単に言ったら通過しようとする人々を受け入れる立場で、人の移動をどう捉えているかということで、その前の時代と違うと思うのです。

そういう人たちをハンガリーの人たちはどう受けとめたというときに、ただ通過しているだけなら、そんなに嫌がなくてもいいのではないかと一見思えるわけです、単純に考えますと。

ですが実際には、例えば、ハンガリー国内でそういう人たちがいろいろ問題を起こしているとか、あるいは多くの人が仕事についてしまって、イギリスで言われたような失業率が高まっているなど、ハンガリーの人たちにとって難民によるいろんな影響が

ある状況なのでしょうか。

○荻野 基本的に多くの人たちはとどまりたくなくて、ドイツに、西ヨーロッパに行きたい。単なる通過地点と捉えている。ただし国境を越えて、例えばセルビアとかクロアチアとかの国境の小さな村落とかですと、やっぱり何千人という人たちが1日に通過していくことが、小さな村とかの住民にとっては非常に大変なことであったということは聞いています。

例えば、途中で野宿したりとか、そこにしばらくとどまっているとき、畑とかワインつくったりするブドウ畑が荒らされていたとか、いろんな不満は、地方の人たちにとってはあったとは聞いているのですが、ブダペストとかにとどまって列車を待っている、さっき写真で見たような、ああいう人たちに対する大都市での実害はないのではないのでしょうか。

あと、そこにとどまっている人たち、難民申請、ハンガリーでした人もいて、それなりに受け入れたとしても、その人たちが現実に雇用とかを脅かすことにはなっていないですね。

近年、シェンゲンとかに加盟することで、ハンガリーの人たちにとって、ドイツや西ヨーロッパに行き働く機会が以前より出てきて、優秀な労働力、良質な労働力が外に出ていっている側面もあるので、決してそれほど、西ヨーロッパで起きているような移民とか難民に対する反感はないと思われれます。

○質問者 ありがとうございます。

○市川 それではほかに質問がある方いますか。どなたでも結構でございます。

○質問者 講演ありがとうございます。

ハンガリーが今のように難民問題に関して、何らかの別の対策とか、それに関する法はあるのか、お聞きしたいです。

○荻野 つい最近、3月ですけど、入ってきた難民申請を例えばハンガリーですとします。その人たちを一定期間拘束することができる、申請している間、一定の収容所に悪く言ったら押し込めておくようなことを可能にするような法律が最近通って、ドイツや何かからまた批判が出たり、あるいはUNHCRとかそういうところからも、ハンガリーには難民を戻すようなことがあってはならないということまで、ここ1カ月ほど動きが出てきています。

後々またいろんな法律をつくったり、とにかく国民投票でうまくいかなかったけれど

も、一部憲法を改正して定住の敷居を高くしようとしたり、いろんなことを今やろうとして10月2日の国民投票の後、11月に入ってからEU加盟国以外の国からも定住者に対して、永住するのを難しくするような憲法の改正を狙ったのですが、2014年の選挙の後、ぎりぎり3分の2だったのが補欠選挙でちょっと負けたりして、欠員ができた選挙で負けたりして、3分の2をわずかながら割り込んでしまい、極右政党の支持が得られなかったので改正に失敗して、その後、また新たに申請する難民に対しては、収容所に押し込めたりすることが法的に可能になるような法律をつい最近制定したり、いろいろとまだ締めつけはいろいろやっています。

○質問者 ありがとうございます。

○市川 ほかに何か質問ある人いらっしゃいますか。

○質問者 講演ありがとうございました。

講演の内容とはずれるかもしれないですけど、オルバーン政権が教育であったり、メディアに対しての拘束を強めているというお話が何回か講演の中でも出てきましたが、お話を聞いている限り、国民の人たちの移民に対する反発とかそういう面を見ても、余りそこまで拘束を強く必要性を感じなかったのですが、なぜそこまでメディアであったり、教育であったり、自国の国民に対してまで拘束を強くするかというのが気になりました。

○荻野 2011年にメディア法という法律ができて、これも非常にEUから批判を浴びて、いわゆる政府に批判的なことを報道をして文句をつけてくるのが、それをメディアに対して何か訴えたりできるようなことが、より簡単にできるようになった法律があります。

割と日本と似ているところは、旧共産圏そうですね、全国紙、例えば朝日とか毎日とか読売みたいな、ああいう全国規模のような新聞は、アメリカに行ったらニューヨークタイムズとかワシントンポストのように割と地方紙が中心になるんですけど、ハンガリーとかロシアとかポーランドもそうですが、全国紙が幾つかあります。これらもだんだん時間がたつにつれて、1998年から2002年までの第一次のオルバーン政権のときなんか対立していた全国紙が、かつてリベラル的な新聞だったのがすっかり政権寄りになって、経営者が変わってしまった。

あと、フェンスが出てくる写真が載っていた、一番発行部数が多かった「人民の自由」という名前の新聞です。かつて共産党の機関紙だったのですが、この新聞が最後

まで結構オルバーンに対する批判的な立場をとって、国民投票のときもオルバーンにしてみたら、さんざん邪魔をされた。

どうも地方紙を、日本と同じように州とかではなくて県で、実際が県ですけど、県レベルの地方紙が、例えば神戸新聞とか京都新聞とか長崎新聞みたいな、ああいう新聞をたくさん傘下におさめたメディア何とかという企業グループ、これはオルバーンの言うとおりに動いているのです。そこは「人民の自由」で新聞を買収するような形で買い取った上で廃刊に追い込むことを去年の国民投票の後でやったり、かなり日本で考えられないぐらい報道に対する規制が強まっているのは確かです。

○市川 もう1人手が上がってました、どうぞ。

○質問者 お話ありがとうございました。

ハンガリーの国民投票の結果についての質問です。聞き逃してしまったかもしれないのですが、投票率が43.9%で不成立ということについて、アメリカとかイギリスとかで国民の予想と異なった選挙結果が出たことと同じように、これはどうせ成立するだろうと思ってみんなが行かなかったから低いのか、それとも興味がなかったから低いのかについてお聞きしたいです。

○荻野 この結果について、つい最近、私の日本のハンガリー研究者の友人がいろいろ書いています。メールできょう事前にいろいろ教えてもらったり、後からいろんなことがわかってきたと言って教えてくれたりしました。

4割ぐらいしか行かなかったのは妥当な結果というか、恐らくわざわざ足を運んだ人の多く、98%はオルバーンの個人の支持者、あるいはフィデスという政党ですが、もともと頭文字をとってそう呼んでいる。体制転換のころは青年民主連合という名前の政党ですが、オルバーンは青年ではありませんし、本当は35歳が定年という若者の政党がスタートして、そのぐらいに年齢になったらフィデスという頭文字だけで呼ばれる。「ハンガリー市民連合」と一応サブタイトルのような名前もついています。

フィデスの支持者を通し、あるいは極右政党、これよりもっとひどいヨッピクという極右政党が10%ぐらい以上の得票率で議席を持っているのですが、極右の支持者も含めたぐらいの形での有権者の数がある。コアな支持者がこれぐらいしかいないのかというぐらいです。

ちなみに、かつて政権与党だった社会党という旧共産党の改革派の流れをくんでいる政党は、受け入れには国民感情として反対だけれども、オルバーンの言うことを聞いて

てはいけないと言って、ボイコット、行かないようにしましょうと呼びかけたり。あるいは難民受け入れに賛成の立場の政党がごくごく小数の小さな政党だけで、あとは思い切ってオルバーンたちのやっていることがひどいから、こんな国民投票は行かないようにしましょうと呼びかけたって、大体50%行かないぐらいの結果になったというぐらいですかね。

かつては、2012年以前の憲法下では、これで十分に効力があつたのですが、要するにオルバーンたちの意図は50%までハードルを高くして、野党が何か自分たちに都合の悪いことを国民投票で訴えても無駄なぐらいに50%までハードルを上げて、過半数いかないと有効な投票が成立しませんよ、としてしまったのですね。

かつて89年の体制転換のときは、国民投票は、大統領制みたいになるのか、議院内閣制になるのかの分かれ道で、体制転換の行方を占う非常に重要な国民投票なんかもあったり、いろいろあつたのですが、恐らく今後何かの形で争点、やったとしても成立するのが非常に難しく、わざわざしてしまったのがオルバーンたちの狙いみたいです。

○市川 ほかに御質問ありますか。

○質問者 はじめのほうで、ハンガリーがいろんな国と国境を接してるんだということがよくわかったのですが、これだけ国境を接している場合に、どういう国、あるいは地域からの影響を今まで受けてきたのか、あるいはこれから受けるのかを教えていただけでしょうか。

○荻野 国境。

○質問者 国境に接しているということで。

○荻野 ちょうど半分ぐらいがシェンゲンエリアの中、EUの中で、北から西がシェンゲンエリア、EU加盟国。反対にこちらはそれに入っていないところ。

クロアチアは、いずれはそっちに入ると思われますけども、シェンゲンがここまで拡大すると想定します。ここの部分が、特にセルビア、ルーマニア、ウクライナあたり。非常に難民の問題だけ見ても、言ったらウクライナ、ヨーロッパ連合とか、ルーマニアも入るには入っていますけども、依然としてシェンゲン内には加盟できない状態です。

このあたりが非常にEUの辺境地帯みたいなところなんです。ここに行ったら、もっと東のほうですけど、内戦状態で、紛争状態に入っています。セルビアにしても、まだ加

盟するのはもっと後です。

変な話、昔のカトリックとか西方キリスト教の辺境地帯みたいなことにまたなっている。この間、国民投票の前にルクセンブルグの外相がハンガリーを絞めないといけなとか言ったら、我々は何百年にもわたって他文明を守ってきたのに、同じことを今回もしているんだみたいな、そういうことをハンガリーの外相が感情的になって反論している。

あれはただ、自分たちがずっと昔はオスマン帝国とかモンゴル帝国とかがヨーロッパに進攻してくる。そこに最前線で我々が戦っていたみたいな、そういう歴史認識に行き着いてしまうこともあるのです。

○市川 あと1問ぐらいいいけると思いますが、ほかに質問ある人いらっしゃいませんか。

○質問者 きょうはご講演ありがとうございました。

先生御自身としては、オルバーンが難民政策に対して、シェンゲン協定とかを厳格に適用しているのは正しいとして、EUとかほかのドイツからの批判をしようがないと、このまま進めていくべきだとお考えなのか、それともEUやドイツと協調的な方向に転換していくべきだというのか、どのようにお考えでしょうか。

○荻野 2015年から16年ぐらいにかけての難民の、むしろ難民危機のときの対応が、これもEU、シェンゲン協定とかダブリン規則とか、これを厳格に適用したら彼らのしてきたことは、違法的なことはしてはいないですが、ただ見てて余りにも手荒というか、個人的な感情もあるのですが、ああいうフェンスをつくったり、鉄条網で封鎖することが、彼らにしてみても全く入れないのではなくて、検問所みたいなどころから合法的に入ってくるものに対して、一定程度入国はさせてはいるんですけど、それを上回る数が一度に押し寄せてくるのを、フェンスをつくるのは余り見てて、特に1956年以降のああいうオーストリアとの鉄条網、高圧電流が流れているのに比べたらまだましです。

ああいうようなものを見ていると、歴史的に経緯をよく専門分野でやっている人間からしたら、非常に2015年の夏にフェンスをつくったという報道を初めて聞いて、写真で見たときは非常に不愉快というか嫌な気持ちでした。ただ、いろいろ警察が手荒なことをしていることについて、これは今になってみたら後に続いているルーマニアとかブルガリアも入ってくると、結構手荒なことはどうもしている。後から同じようなことはしている。そういう点では、僕的に問題はないけれど、あのやり方が果

たしてあれでよかったのかということについては、やっぱりいろいろと疑問は残ります。

2015年のときに強い批判を受けた背景に、西ヨーロッパのメディアが非常に激しく批判したのは、2010年以降のいろんなことがあった後に、またやったか、みたいな報道のされ方をした。ハンガリー人にとってはそれが、また今回も自分たちが悪者にされてしまった、いつもこうなんだ、みたいな。どうしても彼らのメンタリティの中でネガティブというか、非常に被害者意識が強い人たちなので、彼らがいろいろ文句を言うのはわからなくはないです。

結局、難民の問題にしても、僕がブダペストにいたときにウィーンで歴史の調査をしていた友人にメールで聞いたら、やっぱり国内の2等の列車は難民だらけで、知り合いの大学生に聞いたら、みんな早く出ていけとか言ってるとか、反発が非常に強くなっていたことはわかります。

我々もそういう難民とか移民が非常に少ない社会の中で、例えばパリとかミュンヘンとかフランスとかの地下鉄に乗ったら、移民とか黒人とかいろんな人たちがいるけれども、例えばブダペストのふだんの地下鉄に乗ったら、あんまりそういう人って非常に少ない。まだ移民の、ヒトの移動、いろんな人が入ってくることに西ヨーロッパの人ほどなれてもいない。

極右とかポピュリズムの研究は最近いろいろ政治学者がやっていますが、あれは割と西ヨーロッパが中心で、余りハンガリーはヨッピクという、反ユダヤ人とかいまだに言っている政党のことなんかにあんまりふれないです。

移民が社会にはまだそれほどできていない。ルーマニアやスロバニアから入ってきたハンガリー人、もともと同胞の人たちが入ってきているのに比べると、今後いろんな人たちがグローバル化していく中で入ってくるのでしょうか。そのときどうなっていくのかというのは、注目していかないといけないとだめだと思うのです。

答えになってないかもしれませんが。

○質問者 ありがとうございます。

○市川 それでは、一旦ここで休憩にさせていただきたいと思います。

それではもう一度荻野先生に感謝の拍手をしたいと思います。荻野先生、どうもありがとうございました。

(休憩)

○市川 これからプロフェッショナル領域の質疑応答をしたいと考えております。

では、お一方マイクを回していきながら、荻野先生に御知見を拝借したいと考えております。それではお願いいたします。

○質問者 きょうは非常にわかりやすいお話をありがとうございました。ハンガリーについてはこれまで余り知らなかったもので、学生と一緒に学ばせていただける機会を得られてよかったと思います。

私は文学部でドイツ語を専門にしております。幾つか質問あるんですけど、1つは難民のスライドが出てきました、それについてお伺いしたいことがあります。

ドイツのことに関係してるので、ドイツと比較して考えてみると、いろんな背景があって難民を受け入れることでずっときてたのですが、最近はそうではない。というか、それはやりすぎじゃないかという流れも、勢力もいるわけです。ハンガリーでは一貫して難民に対して、受け入れ反対できていたのか、それとも今の政権の中ではそういう方向が強いのか、そのあたりがどうなっているかお聞かせいただきたいです。

というのは、ドイツは難民を受け入れる背景としては、ナチスのような背景もありますけど、ある程度労働力の確保も背景にはあると考えると、ハンガリーのいい人材がどんどんほかの西欧諸国に流れてくるとなると、ハンガリー自身も労働力が必要じゃないかと思うのです。むしろ難民は受け入れてもいい、受け入れるべきだという論調もあっていいのではないかと思うんですが、そのあたりどうなっているんだということがお聞きしたいなということです。

もう1つは、またドイツとの比較ですけど、これはちょっと前の年代、1989年ぐらいの時期の話です。ドイツでは東西の壁が壊れた後に、大量に東ヨーロッパ諸国から本来ドイツ系の人たちが、ドイツに帰ってくるという動きがありました。ハンガリーの領土、以前広がったことからすると、いろんな地域から、民主化とともにハンガリーを目指して帰ってくる流れがあったのか、なかったのか。あったとすると、ハンガリーの中にそういう人たちが融合していくような試みが必ずないといけないと思うんですが、そのあたりどういうふうにくまうくいつているのかとか、どういう試みがあったのか、もしわかればお教えいただきたいと思います。

○荻野 まず難民の労働力としての側面。このあたりはシェンゲン協定に加盟したりして、ハンガリー人自身も西ヨーロッパに出稼ぎとか労働に行く。そうなってくると、どうしても人が不足するという側面は確かにあって、そのあたりでできるだけ難民をある

程度受け入れないといけないんじゃないかという意見も、余り大きな影響力はないけど、あるにはあります。

あと、いわゆる欧州難民危機は2015年以前で、最近知ったんですけど、その少し前だったらコソボあたりから不法な人たちが入ってきている。コソボ紛争が終わってしばらくしてから、ハンガリーにもコソボからのアルバニア系とか入ってきている。そういうのが伏線にあって、難民に過剰に反応した部分も、どうも指摘が最近、統計とかを見て、いろいろ調べた人が言うにはそういう面もあるんです。多分全体的に労働力が西のほうに行くと、その分において、やっぱり労働力の不足という面は出る。

これまでだったら後の質問とかかわってきますけど、近隣諸国からの、ルーマニアとか、特にルーマニアからが一番人数的に多いですけど。ドイツでも、ルーマニアにかつてザクセン人とかいう名前と呼ばれたドイツ系の人たちがチャウシェスクの末期に、もうチャウシェスクが売り渡したような形で、西ドイツに引き取られたような形で。

ドイツ系の人たちよりもルーマニアにかなり少なくなって、ハンガリー系の人たちを、チャウシェスク末期に逃げていった人たちもいますけど、体制が変わってから、かなりの数ハンガリーに移住している人は多いですね。

だから、トランシルバニア、ハンガリー系の人たちやドイツ系がかつて混入していたところに、ハンガリー系の人口がかなり減ってきているのは確かです。その分ハンガリーに入ってきて、例えば1998年から2002年まで、最初オルバーン政権のときにstatus lawですね、英語で言ったら。近隣諸国のハンガリー人の法的地位に関する法律というような、いわゆるハンガリー人証明書みたいなものを申請すれば発行して、一定期間、3カ月だったか働いても構わないみたいなことを、最初のときのオルバーンの政権が法的に保障する。これは周りのルーマニアとかスロバキアが非常に反発した。

あれも労働力としてある程度受け入れることを想定して。これをやると何でルーマニア国籍者でもハンガリー系だったら入れてくれて、民族としてのルーマニア人だったらだめなのかとか、そういうのは差別じゃないのかみたいなことも出てきたり、いろいろと労働力として同じ民族だということもあって、受け入れてるのですが。

一方で、それがうまくいっているのか。やっぱり本国のハンガリー人よりもルーマニアから来る人なんか全体的に貧しいわけですから、あの中でいろんな差別みたいなものがまた出てきたり、同胞だとか言いながらも結構見下していたり、いろんな問題はやっぱりあるみたいなんです。僕の世話になっている知人もルーマニアから90年代に移住

してきたのですが、いつまでたってもブダペストで生活するには、何か疎外感があるみたいなの。

親が西ヨーロッパに逃げて、体制が変わってから留学とかで来て、知り合った友達とかそういうのばかりで、現地のブダペストの人たちのあんまり友達いないみたいな。そういう人はいるみたいですよ。お答えになってるかどうか。

○市川 ほかに質問ある方はいらっしゃいますか。

○質問者 経済学部で私、ポーランドを専門にしているので、どうしてもポーランドと比較してしまう感じですけど。

まず1989年のときに、東ヨーロッパの中で、ハンガリーがどんどん西側に門戸を開いて、ドイツ人を逃がしたのはすごく象徴的なシーンで、あれのおかげでベルリンの壁が崩れていくとかそういうのにつながって、東ドイツがついに折れることになったということで、この間、池上 彰さんか誰かがそのことを取り上げて、そのハンガリーが何で今、こんな難民に対して厳しい、つらい仕打ちをするんだみたいなことをコメントされていたのが非常に印象的なのです。

だんだんそういうふうに私も受けとめてしまったんですけど、もともとハンガリーの人は、多分メンタリティとしては、そういう困っている人たちに対して同情的というか、自分たちもそうだったというものがあるだろうに、どうしてという気がどうしてもしたのです。

どうしたのと考えたときに1つの私が勝手に自分で理解した背景は、ハンガリーは今、経済的にすごく大変なんじゃないかと。リーマン・ショックの後に、いつかEUの中でうまく回っていたハンガリー経済がどうもうまくいかなくなって、ハンガリー自身がひどく国内的に困ってる状態の中で、玄関口のような位置にあるハンガリーが難民を受け入れることになってしまって、そういうことも背景にあるんじゃないかなと思ったのですが、その経済的な背景みたいなものはすごく強いということはないですか。

○荻野 確かに89年のときの東ドイツの人たちに国境を開いた、あのあたり、いろいろこのことも調べたりしたこともあるんですけど、西ドイツやなんか非常に影響力が及んできて、ゴルバチョフから許可を得る前にコールが話をつけて、東ドイツ人をオーストリアに出すという決定をしたり。

ああいう意味で、西ヨーロッパにかなり引き寄せられていた。西ヨーロッパの言うこ

とを聞くようになったということはあるんです。近年の難民の問題で、みんながみんな難民を嫌とか言ってるわけでもなく、それでもNGOとかいろんな活動は、かなり東駅の周り、24時間、ヒッピー医療センターをつくったり。いろいろと支援することに積極的にやっている人たちもやっぱりいるのですが、ただ経済的に見てかなり厳しかったのは事実だと思います。

リーマン・ショックの後、ハンガリーも財政危機に陥って、NATO緊急に有価支援助けて、社会党政権が事実上崩壊というか、しばらく立ち直れないぐらいぼろぼろになって、オルバーンが出てきて。EUからいろんな形で金が入ってくることで、今もってるのだと思います。

財政の再建とかいろいろ、ギリシャほど言われるわけじゃありませんけど、2010年から14年の最初に政権に返り咲いた4年間のときは、かなりEUに反発していろいろと経済的な不況も事実だった。その後に難民が来て、それを受け入れるだけの許容範囲を超えてしまった。

たとえ通過するだけだったとしても、一斉に送り出すこともできないし、かなり長い間、結局、国内にとどまっているのを、とにかく早く何らかの形で出さないといけない。入ってくるのを何とか、不法に入ってくるのだけでも抑えようとしたのがああいふ形、フェンスとか鉄条網になってしまったということです。

○市川 それではどうぞ。

○質問者 お話、ありがとうございます。残念ながらこの大学の学生じゃないですけど、質問させていただきます。

ちょっと専門外になるかと思うのですが、オーストリアとハンガリーはある意味共同体的な存在で、第一次世界大戦でラパッコ条約とトリアノン条約で、そのギャラリティーをしっかりと調べて、その後のヒットラーのある意味、右翼的な政策とかに喜んで一緒にやっていたと思うのです。オーストリアには、そういう移民に対する反対運動とかはないのでしょうか。

○荻野 実はオーストリアも、ハンガリーを出国して今度やってくるのはオーストリアということで、かなり2015年当時はオーストリア国内でも難民に対する風当たりは強かったみたいです。たまたまそのころ、2015年ハンガリーに大量に押し寄せてきていたとき、それが出国して、オーストリアに入ってきた人たちに対するオーストリア人の反応は、初めは同情的だったけれども、だんだんふえてきて国内の2等列車は難民ば

っかりじゃないかとか。

あるいは、例えばiPhoneとかああいうのを難民が持っているのは何か変だとオーストリアの現地の人たちが言っていたのを、知人からいろいろ聞いたりもしたんです。これ、あれがないとエーゲ海や何かを渡るときに、ぼろぼろの船に大量に乗り込んでるときに、スマートフォンで海上保安庁みたいなのところに連絡がとれなかったら大変だったので、命綱であるはずのスマートフォンが、どうも西ヨーロッパの人たちから見たら、それこそ職探しのための道具じゃないのか、みたいな。何で難民と言いながら、そんな高価なものを持っているんだ、みたいなことを言っていたりもしたと聞いています。似たようなことは、ハンガリー人も言っていたのは聞いたりもしました。

ただ、オーストリアでも去年、大統領選挙がありまして、5月だったでしょうか。特にフランスとかアメリカの大統領みたいに政治的な権限が非常に強いものではなく、儀礼的な議院内閣制のもとでの、象徴的な意味での元首です。この選挙も大連立している2大政党の候補が早々と脱落して、結局、自由党という政党を極右と言っているのか、反移民とか難民とかを強く訴えている自由党の候補が、2回投票ですけど、1回目のときに1位になって、緑の党というエコロジストの候補者が第2位で。

これも数週間後に、ちょうど1年ほど前ですけど、決選投票をやって辛うじて緑の党の候補が勝つには勝ったのです。ただこれも結果が僅差だったので、憲法裁判所へ、投票自体が結果に問題があると言って、半年ぐらいたってからやり直して、反移民とか難民とか言っている自由党の候補が負けて。あれが勝っていたらもっとショックだったのかなと。

ちょうどフランスとかドイツの大統領選挙とか議会選挙がこれからありますけど、あれの似たような注目は、去年はされていました。

○市川 次の方、お願いします。

○質問者 フランスの移民問題を研究しております。きょうはありがとうございました。

発表のタイトルの「ヒトの移動」ということで、移民という単語はいつ出てくるのかなと気になりながらお聞きしていて、結果として難民に焦点を当てられてお話しされておりました。

前半の最後で、ハンガリーでは移民社会がまだ未形成であるというお話がありましたので、なるほどとそこで合点がいきまして、よって人の移動と言いながら、移民ではなくて難民問題という用語だけが今回出てきたのかなと合点があった次第です。

少し人の移動で逆方向で考えてみたいんですが、ハンガリーから出ていく人たち、難民とは全く異なりまして、それこそ経済的にも余裕があって、移動する先を選べる人々、特にハンガリーと申しますと、隣国あるいは東から西を目指すにしても、言語的にロマンス語系でもない、ゲルマン語系でもないハンガリーの国の人々が、西で、イギリス、ドイツ、フランス、どこに行こうかというときに、どのような基準で選ばれているのか。もしハンガリーの方々と意見交換をする中で、見聞きしたことがありましたら教えてください。

○荻野 どうしても言葉が、彼ら似たような言葉が、日本語もそうだと思いますけど、ある程度聞いていたらわかる外国の言葉が彼らにもやっぱりない。

ハンガリーに最初に行ってから二十何年たちますけれども、去年、学生時代に留学して帰ってきてちょうど20年たったのです。90年代の半ばぐらいで、なかなか初め現地に行った当初、英語も通じない、ハンガリー語もまだわかっていない。非常にコミュニケーションをとるのが大変だったときもあるのです。

それが、10年までいかななくても、五、六年で見たら、どこ行っても西ヨーロッパと変わらないぐらい英語でみんな受け答えができるようになって、大学院生で行っていたとき、現地の大学生ともなかなか英語でもうまく、ハンガリー語が自分でよくわからないとき、英語で話すときも英語がわかるのって、そんなに言うほどいかなかったのが、今、学生だけじゃなくて、普通の人も英語がかなり通じるようになってきています。

反対に英語がしゃべれる人がふえてくる一方で、年配の人は、昔は90年代に60歳とかの年代の人は、ほとんど外国語と言ったらドイツ語だったのが、今、完全に外国語の地位が逆転している。

恐らくハンガリー人の目指すところは、地理的に見てオーストリアとかドイツが多いのかなと思いますけど、彼らにしても英語でやりとり、十分できているのかなと。どういう職につくかにもよるかと思います。専門的な知識や技術を要する場合だったら、英語で十分対応しているのかなと。

○質問者 ありがとうございます。

○市川 では次の方、お願いします。

○質問者 幾つか質問があって、今とりあえず2つお願いします。

1つは、ハンガリーに少数民族問題があるのかという一般的な質問です。これを聞く理由は、とても一般的に東欧諸国での少数民族問題が紛争に結びついていくという単

純な私の理解があるので、果たしてハンガリーではどうだったんだろうかということが1つです。

もう1つは、先ほど荻野先生は、ハンガリーはEUはなくて、どちらかと言うとEUからいろんなことを、援助はないことによって国が発展してきたんだという、そういう話があったのです。他方でハンガリーはEUのメンバーであり、EUはいろんな共同を目指していたり、あるいは国際機構としても、全ての国が一応平等だという認識があるのです。そういう重要なモジュールであれば、もちろんいろんな援助等は得られるけれども、政策の観点から言えば、むしろ国家主権を主張していくよりも、より何となく積極的なイニシアチブをとっていくことができるんじゃないかという印象を持っているんです。

なぜかと言えば、それは委員会等にそのメンバーとして出ていくことができたりという意味は、ある意味で平等性を担保されているんじゃないかなと思うんです。にもかかわらず、なぜそういうところで積極的なものよりも、むしろ後からおくれて加盟したことがあるかもしれないですが、積極的な立場をとらないのかなという印象なんです。

というのは、先ほどおっしゃっていた難民の受け入れは千何人で、それに対しても余り積極的でないと聞くと、素人目からすると、1,000人ぐらいだったらいいじゃないのという印象を持たなくもないんです。いろいろな国が後ろ向きだったりすれば、むしろそこで後ろ向きではないんだと言っていくことによって、自分の国際機構の中での立ち位置をより有利にしていく戦略もあるのではないかと思ったのですが、それはいかがでしょう。

○荻野 ハンガリー国内の少数民族、これは留学していたときのブダペスト大学、現地の国立大学ですけど、古くからある国立大学です。そこの指導教員の先生が、ちょうど国内の少数派民族問題を専門にやっておられたんですが、かつては第二次大戦終結以前はドイツ系の人はかなりいたんです。

そもそもブダペスト自体、初めは恐らくドイツ人がつくったような町で、だんだん人口がハンガリー人にとってかわられていった、このあたり地方ヨーロッパの町は結構そういうところあると思うのです。

第二次大戦の後、余り知られてないですけど、追放というか、ドイツ系の人たちを例えば、対ナチス協力者という名目でかなり追い出したりも実はしているのです。数が

ポーランドとかチェコスロバキアとかに比べると相対的に少ないのはあって、余りや
ってないですが。

あと、比較的ハンガリーのドイツ系の人たちは、同じカトリックだということもあって
同化傾向が強いから、アイデンティティをどっちに持っているのか、はっきりしない
ぐらいの人たちもかなりいたのは、シュガーレンジンとかそういう言い方で、ハンガ
リーのドイツ系の人たちは、かつてマイノリティーとして扱っていた時期があるんで
す。余り戦後そのことについて、追放とかそういうことをしたことについての歴史の
見直しみたいなことは、少し取り組んでいた研究者も、うちの指導教員なんかもそう
ですけど、います。

あの大きな問題には、むしろそばにいる人たちとのかかわり、ルーマニアやスロバキ
アにいるハンガリー人の問題がどうしても全面に出てしまう。自国にいるマイノリテ
ィーの人は、非常に取り上げられる機会が少ないのかなど。総体的に見て、数が少な
いのは確かです。

あと、EUの中での立場というか、これについては、あそこまでオルバーンが何で自
国の主権に固執するのか、この辺、非常に難しいと思うんです。彼にとってみて、自
国の国民に対して、ここまで自分が強い国家像を示していることを国民に見せる、国
内向けみたいなのところもかなりあるのです。

結局、いろいろ言うのだけれども、EUからもらう金で何とかハンガリーの経済はも
っている。今なんか、いろんなところで公共工事ばかりやっている。その資金はE
Uから入ってきたお金です。だから決して離れるようなことはないのだけれど、ただ、
本来だったらもっと上手にアピールしたらいいところもあると思うのです。2015年に
しても、結局、ドイツに次いでぐらい難民を受け入れることになっていたのですし、
そのあたりもう少し合理的に理屈で説明すればわかるところもあるんですけど。それ
を意図的に自分たちがEUの中で、これほど不当なことを言われながらも、それに抵
抗するような形で、これだけ強いリーダーシップを自分が発揮しているみたいな、そ
ういう自国民向けみたいなのところもあると思います。

○市川 次の方、お願いいたします。

○質問者 私、全く現地に入ったこともないのでイメージが湧かないですが、お話を伺っ
ていて、最初に国境線、たくさんの国と接していること、それからブダペストではな
く、オーストリアあるいはドイツへ移動していく難民が多い。このあたりで、愚問に

なるけど、陸路入ってくるのか、鉄路で入ってくるのか。最終的にはブダペストに集結しているのか。このあたりで、国民感情としても、地方のお話も若干触れられましたが、私の推測では、やはり難民は都市部へ入りやすい。そのほうが何かと便利なのが多いというイメージで捉えているのです。

ブダペストへ集結してくるのが鉄路で入ってきて、ウィーンに2等列車で動いていっていると、こういう流れでよろしいでしょうか。

○荻野 ただ、難民が大量に2015年に来た当初は、4カ所ぐらいの、ブダペストだけじゃなくて収容施設を設けて、そこに一旦とめ置いていたのです。

例えば、レゴレゼンという第2の都市の近く、どこにあったのか僕も4カ所、正確にはわかりませんが。一旦そういうところに入れておいて、その後で移動する場合にどうしてもブダペストに集結させた形で、オーストリア方面に向かう列車に乗せる。

○質問者 先生おっしゃったように鉄格子ですとか、そういうぐらい対応しているとおっしゃっているのは、国境線のごくごく一部の陸路の道路部分だという理解でよろしいですか。

○荻野 結局、許容量を超えて違法に入ってくる分をとめようとしているということです。

○質問者 わかりました。あと、1,000人が大体義務づけられるということですが、まだ過渡期ではあるかと思うんですが。その人たちを国内で教育して、労働に従事させるという前向きな動きがあるのか、あるいはそれはそれで、1,000人はまあまあ自活していけよとほったらかしなのか、そのあたり政府の方針が何かあるようでしたら教えてください。

○荻野 今のところ約1,300人、EUから割り当て、分担で。EU全体で16万人という数字を2015年の秋に出した。実行ほとんどされてない、全体的にされてないし、ハンガリー側もそこまで、ああいう国民投票までやって、拒否しようとしてきているので、まだ受け入れてはもちろんないです。ただ申請がいろんな形で少ないけれども出て、完全に閉め出しているわけではないです。少数ながら、まだ少し受け入れていることは続いているのです。

それを、ある程度定住させて、きちんと労働力と言ったら変ですけど、そういうのが戦略的と言っていいかと思えますけど、そういうところまで結局進んでないのが今のところ、どうしても感情的な議論になりがちで、なかなかきちんと少ないながらも受け入れて、それをどうするかまで国民的にきちんと議論ができているかと言ったらま

だです。

○質問者 ありがとうございます。

○市川 それでは、ちょうど終了の時間になりました。

いま一度、荻野先生に感謝の拍手をしたいと思います。

荻野先生、本日どうもありがとうございました。

<講師プロフィール>

1966年生まれ。関西学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得修了。法学博士。長崎県立大学国際社会学部教授。長崎県立大学大学院国際情報学研究科長。専攻は国際政治学。主要著書に『冷戦期のハンガリー外交　—ソ連・ユーゴスラヴィア間での自律性の模索』彩流社、2004年。



KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY



Co-funded by the
Erasmus+ Programme
of the European Union

産業研究所講演会 (IIR Seminar)

ハンガリー現代史とヒトの移動

(Modern Hungarian history and the 1956 migration crisis)

2017年12月20日発行

編集 関西学院大学研究推進社会連携機構事務部 研究所担当

発行 関西学院大学産業研究所

〒662-8501 西宮市上ヶ原1-1-155

電話 0798-54-6127 FAX 0798-54-6029

Publisher

Institute for Industrial Research, Kwansei Gakuin University

1-155 Uegahara Ichiban-cho, Nishinomiya 662-8501, Japan

Tel +81-(0)798-54-6127

Fax +81-(0)798-54-6029

E-mail: sanken@kwansei.ac.jp